

ハーバート・スペンサーにおける美の概念と近代社会

挾本佳代

「教師の話はウンザリ。音楽と別の話題にしない？」

「いいね」

「何の話題がよくて？」

「“美”について」

「新鮮味がないわ。“男性美”はどう？」¹

1. はじめに

ハーバート・スペンサー（1820-1903）は、彼の活動時期のごく初期に2つの「美」についての論考を発表している。ひとつは「用と美（“Use and Beauty”）」（1852）、もうひとつは「個体の美（“Personal Beauty”）」（1854）である。

スペンサーの著作順をみてるならば、まず1951年に初の著作『社会静学』が出版されている。そして、これら2つの論考があり、ついで『心理学原理』が1855年に、『第一原理』が1862年に出版されている。

『社会静学』は、スペンサーの理論体系において、功利主義批判によって貫かれており、スペンサー社会学のたどるべき方向性を明確にする道標ともいうべきものであった（挾本2000, 168）。また『第一原理』は、その後長い期間にわたって書き続けられることになる「総合哲学体系」の最初に収録された作品であり、スペンサーがその後、緻密に構築していく進化論ならびに進化観の理論的な特質を明示するものであった。人間の知識の限界は存在するのか、それによって人間の描く宇宙像はどのように変化するのか。西欧思想が積み上げてきた哲学的形而上学の根本部分を、進化論という西欧近代社会を席卷した科学的な観点から論じようとしたのが『第一原理』であった（挾本2000, 169）。

¹ 映画『ジェーン・エア』、キャリー・ジョージ・フクナガ監督、2011年公開より。シャーロット・ブロンテによる原作は1847年刊。原作にはこれと同じ「美」についてのセリフはない。しかし、そもそも『ジェーン・エア』は、貴族社会を中心としたヴィクトリア朝の風俗や文化から抜け出て、それとは対称的な生き方を希求する女性を描いた作品である。つまり、「美」もそれまでの旧態依然とした型の中で収まるものではなくてきていたはずである。翻案の映画作品の中で、貴族たちの会話に取り入れられた「美」というモチーフは、「美」そのものが時代の中で変化し始めていたことを示唆するものでもある。

つまり、『社会静学』で提示されたスペンサーの社会学的思考とその理論的な方向性は『第一原理』において明確になっていったわけだが、『社会静学』から『第一原理』までの11年の間に、スペンサーが『心理学原理』第1版を、『社会学原理』(1876-96)といった本格的な社会学理論よりも20年以上、先駆けて出版したのはなぜなのだろうか。この問いは、スペンサー社会学が構築されていく理論的な過程を精査する上でも、彼が心理学を科学としてどのように考えていたのかを考察する上でも重要であるが、この問いを解明する上で必要な観点を、『心理学原理』の直前に発表された2つの「美」についての論考が握っているのではないだろうか。そこで本稿では、スペンサー社会学における『心理学原理』の位置を詳らかにする理論的な準備として、2つの論考「用と美」「個体の美」を詳細に考察していきたい。

ところで、「personal beauty」を「個人的な美」「個人の美」「容姿」「容貌」と訳すことは、進化論を基底として近代社会を批判していたスペンサー全作品の意図を踏まえるならば正確さを欠くと思われる。以下に考察するように、この論考の中では、人間の顔や外見の美しさと、性格や精神の美しさが関連しているのかどうかを検討する上で、近代人の顔の特徴と未開人のそれとを比較しているからである。そもそも未開人は、近代社会以降、思想的に確立されていく、いわゆる「個人」ではない。そこで、本稿においては「個体の美」と訳出している。

2. 「用と美」

スペンサーが生きたイギリスのヴィクトリア朝の時代は、産業革命の成功が人間の経済活動を発展させ、国内政治が次々に変革され、科学技術が進展し、そして進化論の隆盛が引き金となってパラダイム転換がおこった時代である。社会全体の根底からの変化は、当然、それまで貴族社会が支えてきた「美」の価値観を揺らがせ、覆すきっかけを与えることになった。先に脚注で指摘したように、ブロンテの『ジェーン・エア』は、新しい価値観をもって人生を歩んでいく女性の象徴でもあった。

スペンサーの『自伝』はその半生を淡々と語るものであるが、残念なことに、2つの「美」についての論考はその中ではほとんど触れられていない。「用と美」についても、彼は同時期に書いていた論考のタイトル「進化の仮説 (“The Development Hypothesis”）」「建築様式の起源 (“The Origin of Architectural Types”）」「涙と笑いの理論 (“A Theory of Tears and Laughter”）」とともに、その頃に執筆した論考の記録として併記しているだけである (Spencer1904a, 406-7)。それ以外のところでは、新聞に匿名で寄稿していた「用と美」が好評を博した喜びを、父親への手紙に綴っているぐらいだ (Duncan1908, 65)。

「用と美」は、ラルフ・ワルド・エマソンが貝の構造を例に挙げて「自然は、かつて使用 (use) のために創造したものを、そののち装飾 (ornament) へと変化させる」と述べていると指摘するところから始まっている。貝はその成長過程において、最初、口の部分だったところが

次第に、背の部分に回っていき、彫刻と呼ばれる貝殻表面の凹凸構造や棘といった装飾を創り出していく。こうした生物の成長過程にみられる「使用」と「装飾」の関係は、人類が進歩していく過程の「制度、信条、習慣、迷信」といったものなかにも見出すことができ、かつて純粹に実用本位だったものから「美」は進化してきたのだらうと、エマソンの自然論に導かれるようにしてスペンサーは述べている (Spencer1852, 370)。

用と美に関する事例がいくつも並べられていく。たとえば、「地球の表面」のなかでも「原始状態」のままにされている部分を、近代人が見るときの感情と未開人が見る時の感情は異なるものであるという。ハムステッド・ヒースを散策している人間が周囲の風景を視覚的に魅力的だと考えるのは、周囲の耕地と遠くに点在する家々がコントラストを成しているからである。ハリエンシダのような低木で不規則に覆われている風景に対し、未開人は近代人のような感情はもたない。未開人にとっては野生生物の生息地であり、植物の根が育つ大地であったからだ。近代人にとっては「くつろぎや楽しみのための場所」も、かつては未開人にとっての「労働や食料のための場所」だったのであるとスペンサーは指摘する (ibid., 371)。

「荒廃した城」も同じである。封建時代には安全性が重視され、砦の場所や形が設計され、「避難や安全」のために建てられていたものが、今日ではピクニックの時の風景になり、絵画として居間に飾られ、クリスマスイブには城の伝説が語られることになる (ibid., 371)。同様に、「過去の社会状態の中で生み出された物質的な残骸は、私たちの風景の装飾になっているだけでなく、過去の習慣や儀礼や取り決めといったものも、私たちの文学の中では装飾的な要素となっていることがわかる」 (ibid., 371)。苦しむ農奴がいた「独裁政治」も小説に取り込まれて「余暇の娯楽」となり、私たちの日常生活とは対照的な「詩的」な生活を呼び覚ますものとなっている (ibid., 371)。ストーンヘンジにしても、ケルト人の僧にとっては政治的な影響力をもつものであったが、今では遺跡巡りの場所となり、昔その場にいた司祭はオペラの登場人物になっている (ibid., 372)。大して重要ではない「迷信」にしても、たとえば「妖精の言い伝え」などもかつて深い信仰の対象であったが、今では数え切れないほどの短い物語や詩の装飾となり、子供向けの物語本やバレエのテーマにもなっている (ibid., 372)。

「実際のところ、注意深く調べていくなれば、私たちがともかく人目を引くような過去の現象の大部分を、美という目的(purposes of beauty)にしてしまっていることがわかれると思われる」 (ibid., 372)。スペンサーは「用」から「美」に変換していった例は多数あるが、「ある場所やある状況下」においては、「過去の著名な産出物のほとんどすべて」が今では「装飾的な特性」をもつものになっていると指摘する (ibid., 373)。

「用」と「美」の考察におけるスペンサーの核心部分は、当時、歴史をモチーフに絵を描く画家に対し、画壇を活気づけるためには、過去から題材を選んで描くのではなく、当時の生活や行為や意図を描くべきだとの批判に対する意見の中に強く見られる。歴史画を描く画

家への批判の正当性は疑わしいと述べたあとで、スペンサーはその理由をつぎのように考察している。

というのも、ある時代の社会の中で、ある有益な機能を果たしているものが、次の時代の社会の中では装飾的なものとして役立っているというのが物事の流れであるとするならば、逆に、今、ある有益な機能を果たしているものがどのようなものであろうか、ごくごく最近にそうした機能を果たしているものであろうか、それらは装飾的な特性を備えていないことになり、結果として、美が照準する目的や美が不可欠な要素であるとする目的には対応することができないからである (ibid., 373)。

以上の考察を踏まえ、スペンサーは「あらゆる美に対して、本質的に必要な条件は『コントラスト』である」とした (ibid., 373)。「過去の生活様式が興味深い、ロマンチックなものに見えるのは、私たちの今日の生活様式との対比があるからである」(ibid., 374)。そして、スペンサーはつぎのように結論づけている。

社会が成長するにつれて、私たちは過去の時代における習慣、儀礼、取り決め、あらゆる物質的、精神的な産物を徐々に置き去りにするようになり、それらから私たちが徐々に遠のいていくことで、自分たちにとって馴染みのあるものとの顕著な差異がひどく生じるようになる。そして過去の遺物は、私たちに対して詩的な側面を徐々にもたらすようになり、装飾として適用されていくのである (ibid., 374)。

めまぐるしく社会が進展していく中で、近代人は次々に新たな実用本位のものを生み出し、必然的に過去の産物と決別せざるを得ない状況に追いやられてしまっていた。こうした社会状況をスペンサーが善しとせず、近代社会を懸念していたことは、その後、発表された著作からも明白である。そもそも、ある対象を美しいと言い、価値をおく発想は、結果的に功利主義的思想につながることもなりかねない。それゆえ、「用と美」以前に書かれた『社会静学』において功利主義思想とは一線を画していたスペンサーが、安易に「美」そのものだけを論じるはずもなかった。「用と美」を通してスペンサーが見据えていたものは、「美」の質的な転換からさえも浮上してくる近代社会に特有の変化であった。

もともと社会の中で効用や価値があったものが、社会が進展するうちに、その効用や価値の果たしていた役割が消滅し、装飾として残り、それが「美」として認識されるのであった。この歴史にも裏打ちされた一連の流れとしての現象は、実は近代社会の中では、人間抜きで引き起こされるものではないことがわかる。ここで注目してみたいのが、スペンサーが「あ

らゆる美に対して、本質的に必要な条件は『コントラスト』である」と述べていたことである。ここでいう「コントラスト」とは、先に考察した通り、人間がある過去の事象／過去の生活様式と現在自分が生きている時代の事象／生活様式を、視覚的、感覚的に対照させるということである。ただし、その際、不可欠なのが、人間が過去と現在を比較して「コントラスト」がみられると判断する感覚や感情である。この感覚や感情はどこから生じてくるのか。人間に本来的に備わっているものなのか。人によってはまったく備えられてはいない感覚や感情なのか。社会の全員が同様に備えている感覚や感情なのか——。こうした疑問を解消するために、スペンサーにとって必要だったのが心理学だとするならば、「美」に関する論考の後で『心理学原理』が書かれたのは想像がつく。

さらにもうひとつ考えてみたいのが、「美」を転換させてきた主体のことである。ここで「用と美」冒頭で深く触れられていなかったエマソンの目的論とスペンサーの進化論を重ね合わせて考えてみるならば、エマソンが述べていた貝の成長過程における「用」から「美」への転換をもたらした主体は「自然」である。スペンサーとほぼ同時代人であるとはいえ、牧師でもあったエマソンにおいて「自然」はすなわち神でもあったことはいうまでもないだろう。それゆえ、スペンサーは貝の成長過程にエマソンが触れていることだけに注目し、エマソンの背景にある「目的論」には触れないと述べた理由はそこにある。

しかし、進化論を明示してはいなくとも、人間が主体となって遂げられていく「用」と「美」の転換にエマソンが気づいていたところを、スペンサーは救い上げていたと思われる。貝の成長過程を進化論に引きつけて考えてみるならば、生物が進化の過程で獲得し、変化させてきた様々な形は、「自然」の中で生物が生き延びていく上で必要な、無駄のない形だったということがわかる。つまり、貝殻の彫刻や棘も、「装飾」として残ったというよりは残らざるを得ない自然環境の中で、その貝が棲息しなければならなかったということだろう。

そう考えてみると、生物進化の過程で自然によって創出された「美」と、人間がもともと「実用」のために創り出しており、それが時代を経て不必要になり役割転換がなされて創出された「美」とでは明らかに主体が異なることがわかる。「用と美」を執筆した段階では明確な進化論を提示して「美」を論じてはいないものの、スペンサーが想定していた「美」には二種類のものがあったということがわかる。「用と美」では、人間の実用本位のところから転換して出てきた「美」が詳しく論じられる一方で、その根底には進化論を踏まえた「美」も想定しつつ、スペンサーは近代社会を見据えていたのである²。

2 産業革命が成功して以降、イギリスは用途目的に絞った工業製品を大量生産するようになっており、そうした風潮に対抗するかのよう、ウィリアム・モリス（1834-1896）が工芸品に「美」を見出すアーツ・アンド・クラフツ運動を展開していた。そのモリスの影響を受けて、日本で日用品の中に「美」を見出すことを提唱したのが柳宗悦（1889-1961）であった。モリスとスペンサーはほぼ同時代人であるが、柳はスペンサーよりも半世紀後に「用の美」を提唱して民藝運動を展開したが、「美」の在り方

3. 「個体の美」

「個体の美」は、「用と美」同様に、人間が生み出し価値をおいてきた「美」の概念に留まることなく、自然が生み出してきた「美」を通し、より壮大なスコープから近代社会を論じたものである。

スペンサーは冒頭で「性格の美しさと外見の美しさは無関係なものであるとの一般的な見解がある。しかし、私はこの意見と折り合いをつけることができずにいる」と述べている (Spencer 1854, 387)。彼はたとえこの二つの美しさは無関係だと信じている人たちであっても、たとえば崇高な容貌の人によって意地悪な行為がなされたのを見て驚くことがあると指摘する。この矛盾はどこからくるのか。すべてのものの中に存在する「価値」と「美」を関連づける信念が人間に本来的に存在しているということはどういうことなのか。それは生得的なものなのか。こうした問題提起から「個体の美」は始められている (ibid., 387)。

スペンサーは、身体において「有機的な醜さと精神の劣等さ (organic ugliness and mental inferiority)」が結びついていることと、それとは逆に「有機的な美しさと精神の相対的な完璧さ (organic beauty and comparative perfection of mind)」が結びついている実例を挙げていく (ibid., 388-9)。まず彼は「顎」に注目をした。顎が突き出ているのは下等な民族 (the lower human races) の特徴であり、それは「顔の欠陥」として認められてはいるが、顎が突き出ていることと「相対的に知性が欠如していること」の関連性は「間接的なもの」だとした (ibid., 389)。たとえば高等な民族 (the higher tribes) では、身体の器官が使われていくほど発展していくという法則に従うならば、顎も使うほど大きくなり、使わないようになればそれに見合った大きさになる。このことを指摘した上で、スペンサーはここからさらに、下等哺乳類 (the lower mammals) では、顎を咀嚼だけでなく、つかんだり、運んだり、噛み切ったりといったあらゆる動作に用いていることに注目し、やがて「前肢」が顎の役割を担うようになり、手足の動作が複雑に多様化されるにつれ、顎が大きくなるのではなく、脳とその骨格が発達することになり、顎は機能が減少するにつれて小さくなっていくと述べている (ibid., 389)。すなわち、頭蓋骨の上部が突き出し、顎のある下部は後退するようになり、いわゆる「顔面角 (the facial angle)」が増大していくことになる (ibid., 390)。

人類の文明が進展する過程で、このような「機能と形が調和することで起きる変化」は継続的に起こっていった (ibid., 390)。「私たちは顎を守るために手を使うのではなく、手を守るために道具を作り、蒸気機関の工場では、道具を作るための道具がみられるようになったのである」 (ibid., 390)。スペンサーは、「下等動物においては、技能と賢さが増大していくと同時に、脳の部分の隆起と顎の後退がおこり、それは未開状態から文明生活に人類が発展し

にもとづくならば、スペンサーと柳とでは正反対の「美」を提唱していたことがわかる。

ていくあいだ続いていったが、その鍛錬の結果として、精神力の向上がともなっていたのである」と主張し、醜いと見なされる顎の隆起と本性が確実に劣っていることの間「有機的な関連性 (an organic relationship)」があるとした (ibid., 390)。

こうした「後退した額」「突き出た顎」「頬骨の出っ張り」という「醜さの主要な三要素」が、精神が劣っていることを示しており、これらとは別の「目と目の間が開いていること」「鼻が平べったく広がっていること」「鼻孔が前へ向いていること」「長い口」「大きな唇」といった「顔の欠陥」もつねに三要素と関連して、人間の知性が増大するにつれて三要素とともに消滅するのであれば、「容貌のあらゆる欠点となる特徴」は「精神の欠陥」を意味することになるのではないかと、スペンサーは述べている (ibid., 392)。しかし、自分たちが掲げる「人間の美しさの理想」がこうした特徴がないということではなく、それとは反対の特徴によって決定されたり、ギリシア神の彫刻にみられるようなこの理想が「超人的な力と知性」を代表するものであるとされていたり、その理想を掲げる民族が神には及ばないまでも「精神的な優位性」によって他と区別されていたりするのならば、美しさや醜さの主要要素はそれぞれ精神の本質の完全性や不完全性と結びつけられていると結論づけるだけの「強い根拠」を自分たちはまだ持っていないのではないかと、スペンサーは疑問を呈している (ibid., 392)。表情や顔の変化は性格を示し、それらが反復されていくことで肌や筋肉や骨格にも影響が与えられ、それは子孫に受け継がれていく傾向がある。そうであるならば、容貌が順応していくそれぞれの過程や、習慣的に行われた順応の痕跡や、先祖から受け継いできた痕跡や、体型や民族の特徴を表す顔の骨格や外皮の輪郭のなかに、「心理学的な意味合い」が見出されたときにはじめて、あらゆる容貌の形態が精神の形態と関係し、本性にもとづいて、容貌が賞賛に値するものなのか、そうでないのかが判断されると結論づけることができると、スペンサーは考えていた。

ここでスペンサーが「心理学的な意味合い」と述べているものは、別の箇所ではつぎのように提示されている。

日頃から私たちに知的に劣っていることが顕著にみられるものだと連想させ、未開状態から文明状態に進展するにつれて消滅してしまうような顔の特色は、心理学的な意味合いをもつものであると結論づけられるのは理にかなっているだろう (ibid., 391)。

スペンサーが「心理学的な意味合い」に言及することで主張しようとしていたことは、すなわち、容貌の特色を知的なものか、そうでないかを決定し、それに「美」という価値を置いたり置かなかったりするのは、近代人の心理作用によるということである。西欧近代社会はその構成原理として啓蒙思想を根底に据えてきた。人間の理性こそが思考に普遍性をもた

らすのであり、未開人は近代人とは異なりいまだ啓蒙されていないと考えられていた。近代人は、自分たちが未開人よりも肉体的、精神的に秀でており、未開人よりも上等な人種であるとの意識を持っており、それゆえ、ギリシア彫刻のような容貌を美しいとみなし、そのような特徴をもたない容貌に美的な価値を置いてはこなかった。

しかし、「個体の美」冒頭でスペンサーが指摘した「性格の美しさと外見の美しさは無関係なものであるとの一般的な見解」に対する根拠は、西欧近代人と未開人との間には何ら差異はないという思想が貫かれて初めて提示することができるものであることがわかる。これは啓蒙思想とは大きく矛盾することになり、西欧近代社会の構成原理を揺るがすことにもなる。つまり、啓蒙思想に導かれて「美」を決定づける心理を、そもそも人間が持っているとするならば、「性格の美しさと外見の美しさは無関係なものである」と言うことはできず、これら二つの美しさは関連するものであると認めざるを得なくなるのである。

スペンサーは「美」という概念を持ちだし、人間の内面と外見の美しさに関連があるかどうかを論じることをすれば、西欧近代人にとっては必ず論理的な綻びが露呈してくるがわかってきた。だから、「美」に価値をおく人間の心理が、西欧近代人に特有のものなのか、未開人にも共通するものなのか。未開人はその心理を進化過程において西欧近代人同様に備えていくのか。こうした心理は人間に永続的に見られるものなのか——。こうした心理学的な問題を解明した上で、人間の内面と外見の美しさの関連性は正確に論じることはできないとスペンサーは主張していたのである。

このように考えてくると、「個体の美」という論考において、スペンサーは文明論的な課題に対してスコープを拡げていたことがわかる。彼が言うように「美は皮一重」という諺は実に皮相的なものとしか言えないものなのであった (ibid., 394)。

心理学的な意味合いに論及するのとは別に、人間の内面と外見の美しさの関連性を詳らかにする方法として、進化論的な発想をスペンサーは提示している。この発想は西欧近代人だけを特定するのではなく、「あらゆる文明化された民族」であろうが、「部分的に文明化されていない民族」であろうが、肉体的にも精神的にも、根源的には原住民の血をひいた身体構造をもっているとするところに基づくものである (ibid., 394)。子供をみてもわかるように、両親それぞれの特質を平均的に受け継いではおらず、兄弟、姉妹もその容貌はそれぞれ異なるものである。つまり、二つの異なる生命体から作られた一つの生命体は、親の特質の平均になるのではなく、親それぞれの様々な部分を取り込んで作られている (ibid., 396)。

スペンサーは世代を超えて生じる外見的な継承の問題を、人間だけにとどめることをしなかった。彼は、優性なイギリス種の羊と交配させることで、劣性なフランス種の羊を改良しようとした実験が何度も失敗を繰り返した原因について言及している (ibid., 396)。この実験が失敗したのは、フランス種の羊が「純血種」で構造上安定していたのに対し、交配したイ

ギリス種の羊が「混合種」で構造上不安定だったことに起因していたという (ibid., 396-7)。この実験の結果を踏まえ、スペンサーが導き出したのは、世代継承された生物種のうち、環境などの条件が悪い中でも生命維持能力に優れているのは、混合された組織構造をもつ「混合種」ではなく、純粋な組織構造をもつ「純血種」だということだった (ibid., 398-9)。スペンサーは、そもそもイギリス人がサクソン人、ノルマン人、デー人、その他の民族など文明化された人種との混血であることに言及し、混血によって組織構造はより複雑になっており、そのことで神経組織やその他の組織に「不調和 (irregularity)」が生じるようになり、その不調和が「精神的、肉体的な本性」に浸透していくことがあることも指摘している (ibid., 399)。そうであるならば、表情が作り出される際には、物理的な結びつきのある「容貌」と「神経システム」の間にも多かれ少なかれ「不調和」が生じていることも証明できるはずであるという (ibid., 399)。

以上のことを踏まえ、スペンサーは次のように述べ、「個体の美」を締めくくっている。

性格の美しさは外見の美しさに関係しているという考えを妨げる障害はかなりの程度なくなる。平凡な容貌と高潔さが、または素晴らしい容貌と卑劣さが共存することも認められるものの、根本的に精神と外見の完璧さに関係しているものであり、今日見られているようなそれらの矛盾の根拠が解明された時には、いずれ結びついているものであることが明らかになるだろう (ibid., 399)。

そもそも人種の血統を考えてみるならば、西欧近代人はイギリス種の羊のように「混血種」なのであり、外見の美しさをともなう表情を左右する神経システムにおいて少なからぬ「不調和」が生じることがある。そうであるならば、そのような「不調和」が生じないところで発現する「外見の美しさ」は、そもそもからして、かなりの低い可能性で存在するもののはずである。それゆえ、未開状態から文明化の過程において民族間の遺伝子を交配させ、身体的な機能を進化させ、知性を増大させていったのが西欧近代人であるとするならば、そこに「外見の美しさ」を伴った人間も少なからず存在することになる。文明化の過程を踏まえるならば、「外見の美しさ」と「性格／精神の美しさ」は関連すると、進化論的、生物学的な状況を踏まえながらスペンサーは考えたのである。

4. おわりに

ところで、人類の血統における「混血種」と「純血種」を考えるならば、「純血種」が「混血種」よりも優性であるとの法則は、西欧近代人だけに適応されるものではないことがわかる。「純血種」の未開人の場合はどうなるのか。未開人の場合においても、「外見の美しさ」は可能

性が低いものであることは明らかだが、その未開人の「知性」「精神」「性格」といったものはどう判断すればいいのか。スペンサーにとって、啓蒙思想に裏打ちされた西欧近代人の「美」に対する判断基準では不足する観点を示唆してくれるのが心理学であったのではないだろうか。それゆえ、「用と美」「個体の美」の直後に『心理学原理』をスペンサーは出版したのではないか。この『心理学原理』の詳細な考察については、別稿に譲りたい。

しかしながら、「美」という概念を通し、西欧近代社会の構成原理に踏み込み、文明論的な課題の解明にも挑んでいたスペンサーの論理が、深い部分まで読み込み解釈されることは少ないようである。

マーク・フランシスは『ハーバート・スペンサーと近代生活の創造』(*Herbert Spencer and the Invention of Modern Life*)の中で、スペンサーの「美」の概念について、次のように考察している。

美は生活と結びついているが、美は生活の外側にあるものであり、死んでから宣言されるものであった。この初期の美に関する分析は、スペンサーの社会についての急進的な批評につよく結びついている。1850年代のあいだ、美は貴族政治が過去から受け継いだものであるのと同じように遺物であったのだ。……美に関するスペンサーの初期の考えの要約は、ジョージ・エリオットによる小説にあるメタファーの中に見られる。この中では、一人の若い女性の美は、遺伝的な重要性がまだ見えぬ種の中にあるとはいえ、桃の表面の皮になぞらえられている。進化論者に対して彼女が重要だとしたものは種だった。……エリオットは女性の外見の美しさは、彼女の祖先、おそらくは祖母に帰すると注目していた (Francis2007, 84)³。

スペンサーの「美」の概念を貴族社会の中で受け継がれた「遺物」だと読み解いてしまうと、彼の論理の根底にある進化論的、文明論的な発想を一切見通すことができなくなってしまう。フランシスも指摘しているように、スペンサーの「美」に関する論考とエリオットの小説『アダム・ビード』(1859)は、二人に交流があったこともあり、実際にエリオット研究者がスペンサーの名前を引き合いに出して論じられることが多い。

中でも、ナンシー・パクストンの『ジョージ・エリオットとハーバート・スペンサー』は『アダム・ビード』と「個体の美」を関連させて、次のように考察している。ヘティは登場人物の一人である。

3 「美」ではないが、フランシスが「美」と「生活」を関連させて論じているのと同じように、山岸健は、スペンサーにおける「芸術」が「生活現象」「社会現象」として理解されていたと考察している (山岸1971, 158)。

語り手は、ヘティの美しさを、女性の美しさが男性の知性を補って完全なものにするという、神によってデザインされた徴候ではなく、「不完全な」ものとして描くことにより、スペンサーの初期の論考「個体の美」の中で明示されていた考えを引き合いに出し、それに異議を唱えた。……ヘティの「不完全な」美を描くことで、完全な美が、女性の道徳的な貞操ではなく、男性の完全な知性を反映しているという、いまだ吟味されていないスペンサーの仮説にエリオットは疑問を投げかけたのである (Paxton1991, 47)。

パクストンは『アダム・ビード』が「個体の美」に対する批判から生まれてきた作品であると主張しているのであるが、そもそもスペンサーが論じた「美」が女性を象徴し、「知性」が男性を象徴していると想定する理論的な出発点からして、スペンサーの論理を読み誤らせている。ジェンダー論の立場から「個体の美」を読み解き、「美」が女性だけの特質であると断定するならば、西欧近代人だけでなく、未開人も含めた全人類を射程に入れた上で、文明論的課題にまで広がっていく「美」の概念にアプローチを試みたスペンサーの核心部分をつかむことは難しいだろう。

1862年以降スペンサーが発表していくことになる「総合哲学大系」と名付けられる理論体系からすれば、「用と美」「個体の美」はひとつの通過点に過ぎない小さな論考である。しかし、それを精査することで浮上してきたのは、スペンサーが社会学よりも先に心理学の必要性を感じて、文明論的課題を提起していたということだった。「美」という小さな穴の先には、彼が構築していくことになる壮大な理論体系がどこまでも広がっていた。その広がりやの所在を示唆していたのが、まさにスペンサーの「美」の概念だったのである。

(成蹊大学経済学部教授)

参考文献

- 挾本佳代 (2000) 『社会システム論と自然——スペンサー社会学の現代性』, 法政大学出版局。
- ブロンテ, C (1847) 『ジェイン・エア』上, 下巻, 光文社古典新訳文庫, 2006年。
- 山岸健 (1971) 「ハーバート・スペンサーにおける芸術と社会」, 『哲学』第57集, 慶応義塾大学三田哲学会, pp. 137-164。
- Duncan, David (1908) *The Life and Letters of Herbert Spencer*, Routledge/Thoemmes Press, 1996.
- Francis, Mark (2007) *Herbert Spencer and the Invention of Modern Life*, Acumen.
- Paxton, N. L. (1991) *George Eliot and Herbert Spencer: Feminism, Evolutionism, and the Reconstruction of Gender*, Princeton University Press.
- Spencer, H. (1852) “Use and Beauty”, *The Works of Herbert Spencer*, vol. 14, 1966, pp. 370-74.

- (1854) “Personal Beauty”, *The Works of Herbert Spencer*, vol. 14, pp. 387-99.
- (1904a) *An Autobiography*, vol. 1, *The Works of Herbert Spencer*, vol. 20, 1966.
- (1904b) *An Autobiography*, vol. 2, *The Works of Herbert Spencer*, vol. 21, 1966.